

# 従姉と金責め夏休み



玉子王子 著

## 一章 お姉ちゃんとお風呂の約束

鈴木厳(ゲン)の家は元々地主で、広いものだった。

夏休みには親戚が泊りに来たりする。

「それじゃ、二週間ほどよろしくね」

かなり乳房の大きな三〇代中盤の女。厳の父の妹、叔母。そして娘が三人、上は高校、真ん中が元と同じで十歳、下が七歳。

家には両親と七歳の妹と父方の祖父母。

大人同士が話す間に、厳が親戚三人を離れに連れていく。案内というほどでもないが、叔母は結構遠くに住んでおり、旦那も仕事が忙しく今も来ていない、遊びに来るのは珍しいのだ。

まあ毎年来る事は来るが、来てもあわただしく一泊して帰るのが大体だ。

今回は長く泊るというので厳の妹は楽しみにしているようだった。

厳はさほどでもない。

——女が来ても仕方ねーよ。

恥ずかしい半分、年相応のクソガキ半分。

ともかくいくつも部屋があるので三姉妹それぞれに一つずつ使ってもらう。みな和室だ。

妹ミキナと三姉妹の下二人が早速遊びだす。

厳は自分の部屋に一人で戻り、ゲームを始める。

彼の部屋も離れにある和室である。

遊び始めると、長女町垣キミハが入ってくる。

一七歳で母譲りの結構な巨乳の持ち主。まだまだ子供だが、厳一人放っておいて女だけで遊んでいるのもなんだかな、と思う程度には大人だった。

テレビの前に座っていた厳が気づいて頭だけ振り返る。

「え、あ……」

目が思わず大きめの胸元に引かれ、慌てて目を反らす。

——キミハ姉ちゃん胸大きくなったな、昔一緒にお風呂に入った時とは全然違う……思わず見ちゃった。気づかれてないよな。

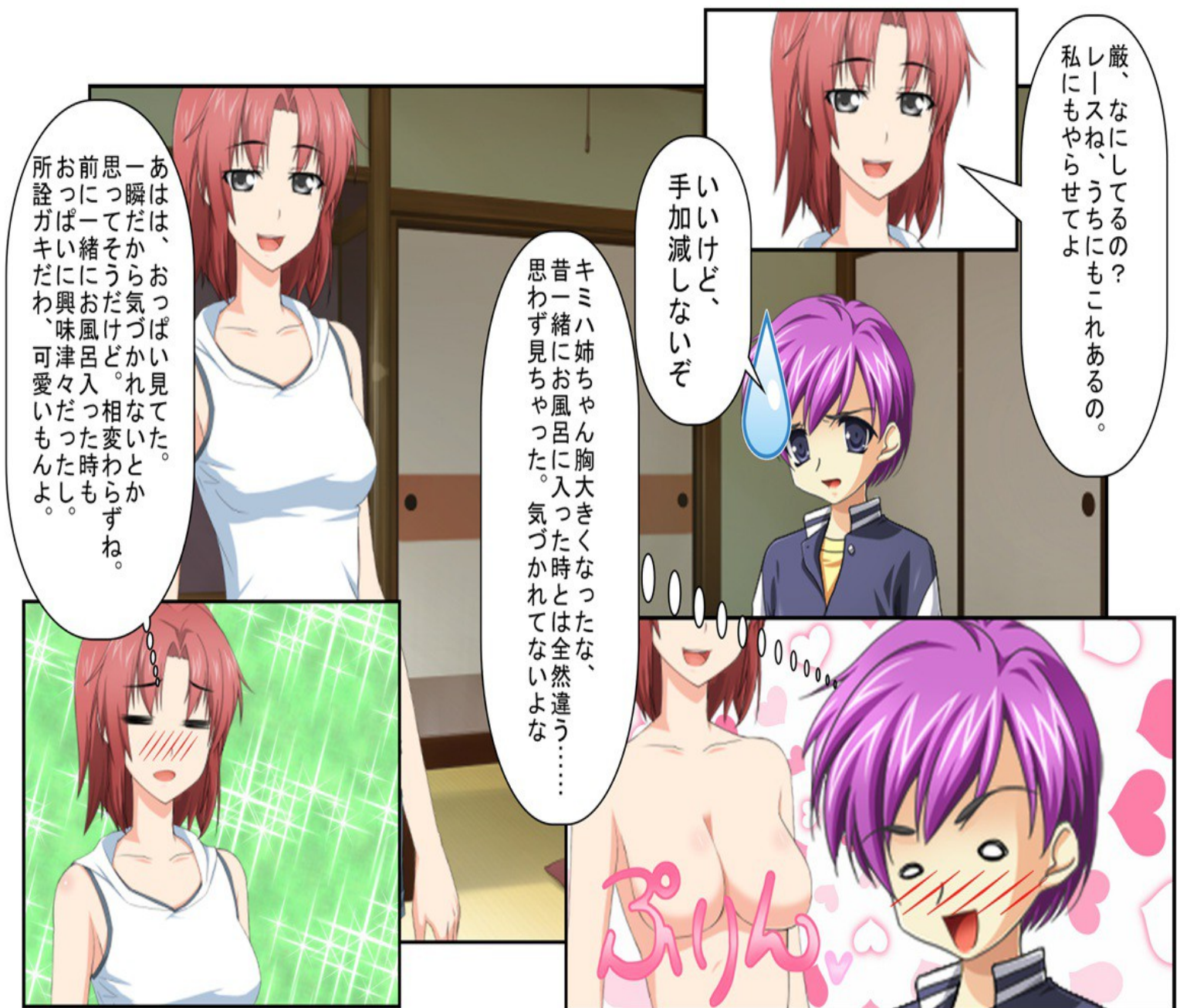
テレビに目を戻す。

その背中を見つつ、にんまりするキミハ。

——あはは、おっぱい見てた。私見る男の九割はまずおっぱい見るから、その視線には鋭いのよ私。一瞬だから気づかれないとか思ってそうだけど。相変わらずね。前に一緒にお風呂入った時もおっぱいに興味津々だったし。所詮ガキだわ、可愛いもんよ。

「厳、なにしてるの？ レースね、うちにもこれあるの。私にもやらせてよ」

「いいけど、手加減しないぞ」



「へー？ お姉ちゃんに勝てるかな」

「誰がお姉ちゃんだよ」

「あは、強気じゃーん」

ペロ、と唇を舐める。

厳の横に座る。

グイ、と肩を押し付けて密着する。

「お、おい狭いよ」

「うふふ、厳、忘れちゃったかな？ 何年か前、もう五年も前かな？ アイミが小さかったからお母さんもミユコも来なくて、私だけお父さんと来た時の事」

「え……」

——何言ってるんだ？



首をひねる。

思い出はいろいろあるので「忘れちゃったかな」といわれても今一つピンと来ない。

キミハもそれに気づいたようで、自分が思い出させたいエピソードのヒントを出すことにする。

「お風呂で……」

「え、お、お風呂で？」

思い出すは年上従姉の乳房一択、乳房一択、乳房一択。

忘れようがないその幻が目の前を飛び交う。

顔を赤らめて思い出すは乳房一択。

一択、のはずだった。

だが何か、頭の中に押し込んでいた物がわずかに顔を出す。

——え、なんだ？ 何か忘れてる？

目が泳ぐ。チラリと従姉を見る。

いたずらっぽく笑い、指を弾く。デコピンの形で。二回。

弾きつつ、小声で呟く。

「キンキーン」

「あ」

胡坐をかいていた巖、思わず膝を閉じる。キュ、と肉玉が縮む。

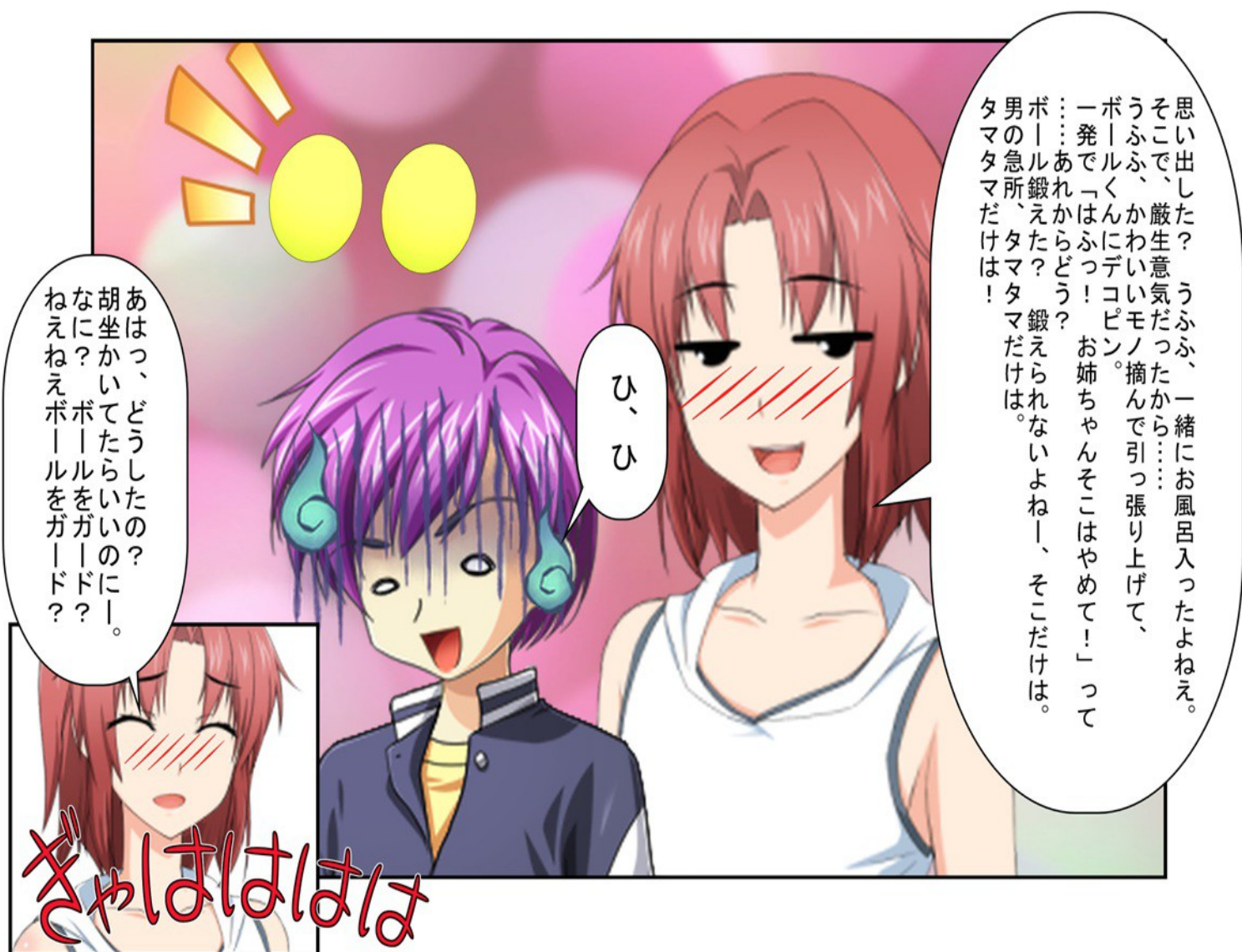
縮んだところまでは想像できていないが、急所を庇う動きに満足するキミハ。

「思い出した？ うふふ、一緒にお風呂入ったよねえ。そこで、巖生意気だったから……うふふ、かわいいモノ摘んで引っ張り上げて、ボールくんデコピン。一発で「はふっ！ お姉ちゃんそこはやめて！」って……あれからどう？ ボール鍛えた？ 鍛えられないよねー、そこだけは。男の急所、タマタマだけは。タマタマだけは！」

「ひ、ひ」

胡坐をほどいて三角座りの形で股間を庇う。歯を見せるキミハ。

「あはっ、どうしたの？ 胡坐かいてたらいいのにー。なに？ ボールをガード？ ねえねえボールをガード？」



「う、うるせえ」

「ん？」

「いや、何でもない」

「そうそう、女の子には優しくね？ 男の子は強いんだから」

「う、うん」

「強いんだから……ここ以外」

胡坐をかき、スカートの前をペンペン叩くキミハ。

見て目を見張る厳。

「あっ」

「うふふ、これでも痛いんだよね？ ついてる子は。こんなので……マジで痛いのか？ 金ボールくんは」

ベシベシベシベシと遠慮もなく自分の股間を掌で叩きまくる。

自分はこんなもの平気、生意気言ってるそっちにコレやっちゃうよ、という見下しと脅し。

「うわあ、姉ちゃん大丈夫かよ」

「んー、全然大丈夫だよ」

——おお、本気で心配してね？ うーん、マタンキくんはこれでもマジで痛いんだねー。ついてない私が頑丈だと知りつつも、心配しちゃうぐらいマタンキ弱弱と。

「ついてないから平気よ平気。厳なら今頃……女の子だったかもだけど！ 女体化してたかもだけど！ まあキンキン攻撃されなくなってラッキーかな？」

「ざ、ざけんな！ 絶対嫌だ！ 女になるなんて！ 死んでも嫌だぜ！」

「へー」

ニマニマしていた顔を急に冷めさせるキミハ。

「そんなに女が嫌なんだ？」

「もちろん……ん、あ」

「こらっ！」

ギュウ、と抱き着いてくるキミハ。

細い肩に巨乳を押し付ける、そして顔を真っ赤にした厳の頭を抱きかかえ、巨乳に埋もれさせる。

「はう、ちょ」

「女が嫌だって？ これでも？」

「はふううう、ちょ、で、でも女になるとか……」

十七歳と十歳では体格に大きな差がある。

片手で巨乳に抱きかかえつつ、片手を厳の股間に伸ばす。

下から慎重に太もものに触れる。ビクリとする厳、暴れるが力の差から逃げられない。いや、まだ必死で騒いでいない。このままでは殺されると思っていれば厳も狂乱して片手の縛めぐらい逃れたかもしれないが、今は逃げたいというより混乱状態というべき状態だ。

その半端な状態の従妹を抱きかかえたまま、す、と太ももの上に手を滑らせ、自分にはない膨らみを包み込むキミハ。

手の動きに気づき、びくりと震える厳。

「あっ！ やめ」

「動かないで。動いたら……うふふ、女にするよ？ 潰しちゃうよ？ 男のダブルゴールド、ダブルゴーーールドっ！」

「ひ、ひっ」

震え、身動き取れなくなる厳。

「あはは、大事なモノモミモミ。おー、結構成長したんじゃない？」

——ってというか、この子。うちの彼氏と同じぐらいのもっこりじゃない？ 親戚として鼻が高いと感じるべきか、彼女として不甲斐なく感じるべきか……あら？ やだ、この子……男の子なんだ。いや、男の証、今握ってんだけどね。元気になってきちゃった。

顔を真っ赤にする厳。目が泳ぐ。

「あ、あ、その……ね、姉ちゃん」

「元気ね。いいわ。厳が元気でうれしいぞお姉ちゃん」

——ここはうまくやらんと。勃起気づかれてこのぐらいの男の子がどう思うのかマジでよくわからないけど、トラウマになったりしたらかわいそうだし、そこまで行かなくても泣かれたりしたら相当面倒なことになる。男女逆だった場合に比べたらまあちょっと怒られて終わりだろうとは思うけど、

避けたい事態なのは間違いないわ。

両手を放し、少し離れるキミハ。

棒立ちで、股間を手で押さえる巖。顔は真っ赤だ。

表情をよく観察するキミハ。泣きださないか不安だが、そんな様子はない。

小さく安堵の息を吐く。

——よしよし、傷付いてるって感じじゃないわ。これなら何とかなるでしょ。っていうか、なんか私、ドキドキしてるわ。ショタってわけでもないし、巖にどうこうしたいってわけでももちろんないけど、こういうエロ話して目の前でチ○コ立てられりゃ多少はね。

赤らんだ顔、熱い吐息。見下ろすキミハ。

「ね、秘密の取引しない？」

「取引？」

「巖の、元気なアソコみせてくれたら……私のおっぱい見せてあげるよ？」

「え、お、おっぱい？」

目を輝かせ、上を見る巖。顔ではなく、巨乳を見る。

「あは、気になってたんだ。お姉ちゃんも気になってさ。私たち三人とも女じゃん？ 男のアソコってだけで珍しいのに、元気に**びよんびよん状態**って言うのは激レアだからさ」

彼氏持ちの非処女なので、実際には言うほどレアとは思っていない。

「で、でもこんなところじゃ」

——おいおい、本番でもやるつもり？ でもまあ、ここだと誰か入ってくるかもってのはあるわね。鍵もない引き戸だし。昼間だしね。

「そうねえ……それじゃ、お風呂」

「お、お風呂？」

目をギラつかせる巖。その性欲まみれの表情に内心引いて少し頬を引きつらせつつ、頭を撫でる。

「あららー？ もう私が何言うかわかってんでしょ？ このエッチ星人が一。知ってる？ エッチの源はそのボールくんなんだよ？ 巖の結構デカイ目だから、エッチパワーもアソコもデカイんでしょうねー」

「べ、別にデカくねーよ！」

「ふーん？ でも、クラスじゃ一番でしょ？」

「二番……こんなでっかい奴いるから」

「え？ いやいや……」

——おいおい、その手の幅、二十センチはあるぞ。男同士だから、ブラブラしてる状態だよね？ 立ったら三十行きそう。そんな巨根ショタなんて……いや、たまにいますよねそういう子。

目をぱちぱちさせて困惑する。が、すぐ持ち直す。

「あは、自白したねー？ 巖のそれが、堂々ナンバー2のデ○チンくんだって。巖のチン○ン、クラスで二番の立派なサイズー」

「あ、それは」

「っていうか……チン○ン比べしてるんだ？」

——うわ、見てえ！ チン○ン比べ合ってる男の子たち！ ガキチ○ポ見てえ！ 混ざってる大人並みの巖のや、馬並巨根ショタくんのも見てえ！ 並んでブラブラしてるどころ……やべ、別にショタじゃないよね私？

「と、ともかく、今日は一緒にお風呂入ろうね」

「えー、そんなの恥ずかしいし……」

「こらこらー、さっき明らかに期待してたでしょうが。男の子でしょ？ おっぱい見たい？ おっぱい見たい？」

「べ、別に見たくねー……あっ」

腰に手をやり、大股開きのキミハ。

「そういう嘘つく奴は教育やろなあ。お姉ちゃんには付いてないモノに、みっちり教育やろなあ。うちの二人と、ミキナちゃんと、女の子四人で同盟組んで厳のタマタマに教育やろなー」

青ざめ、厳が股を閉じる。

「いや……おっぱい見たいです、見たいなあ」

「うふふ、素直でよろしい。それじゃ、続きはお風呂ってことで……今のところはゲームしようか」

「う、うん」

「お風呂忘れたら教育だからねー、双子のボールにねー」

「わ、忘れないって」

「よろしい」

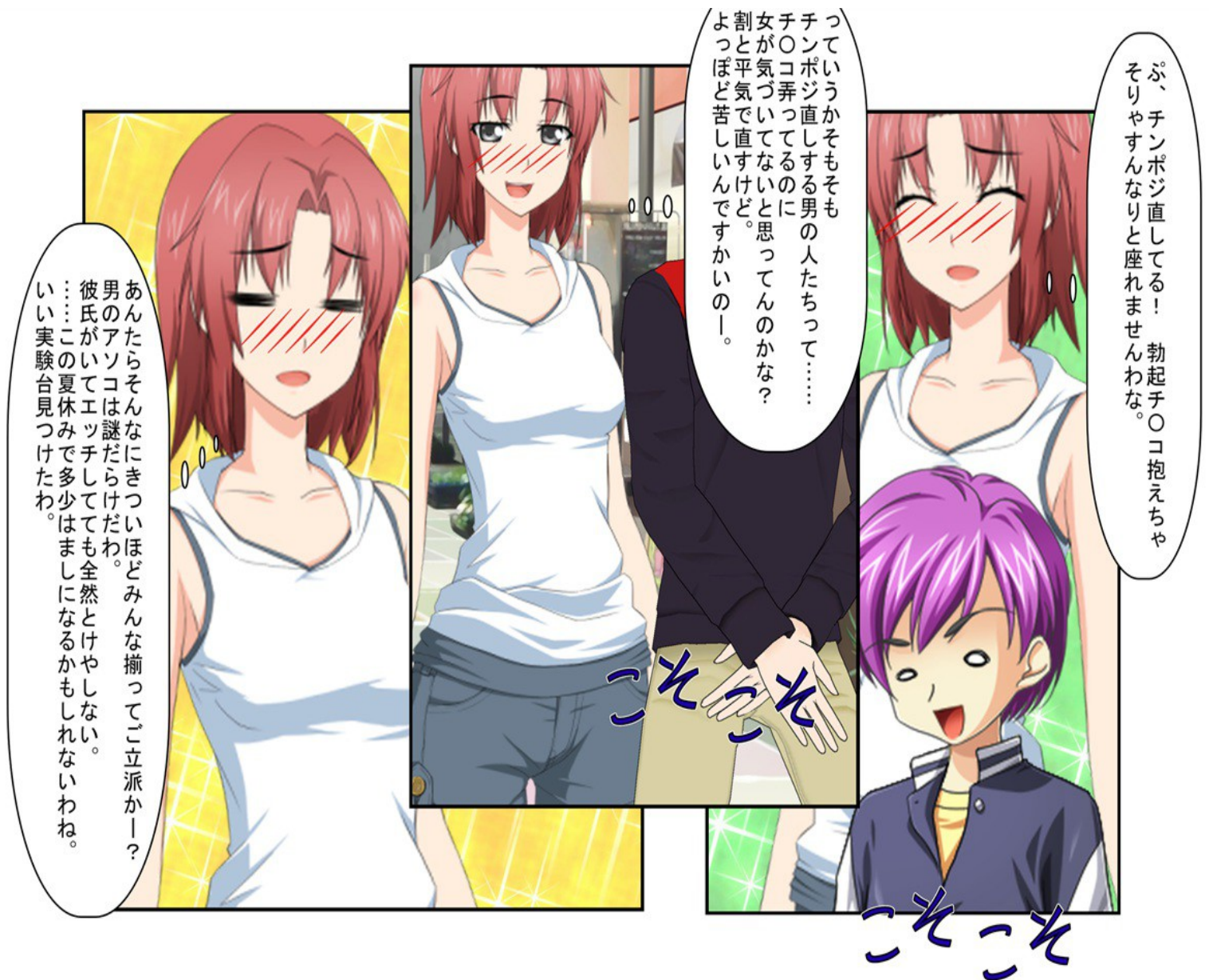
顔を真っ赤にしてテレビの前に座る厳。

もぞもぞと座りにくそうだ。

頬を引きつらせるキミハ。口を押え嘔き出しそうだ。従弟を見下ろし震える。

——ぷ、チンポジ直してる！ 勃起チ○コ抱えちゃそりやすんなりと座れませんわな。っていうかそもそもチンポジ直する男の人たちって……チ○コ弄ってるのに女が気づいてないと思ってんのかな？ 割と平気で治すけど。よっぽど苦しいんですかいのー。あんたらそんなにきついほどみんな揃ってご立派かー？ 男のアソコは謎だらけだわ。彼氏がいてエッチしてても全然とけやしない。…この夏休みで多少はましになるかもしれないわね。いい実験台見つけたわ。





考えつつ、シャツを弄る。

にんまり笑う。

——ちょっとからかってやるわ。ここでエサやって手懐ければ暇じゃないかと思ってたここでの滞在、楽しめそうだしね。

「厳、ちょっと前払いしてあげるわ。こっち見て」

「なんだよ……はうっ！」

「はい、オッパイポローン」

シャツを鎖骨のあたりまでめくり上げる。ブラはすでに外して腹のあたり。丸々としたメロンとスイカの間ぐらいの大きさの球体が胸から突き出す。

巨乳と爆乳の違いというのは曖昧なものだが、横から見た乳房の輪郭の円形が胴体に減り込んで半円ぐらいならまだ巨乳のレベルで、突き出して円に近づいているなら爆乳とっていいのではないかな。

今厳たちの祖父母と話しているキミハの母はしっかり胴体から分離した円を描く爆乳である。

目を丸くし、若々しい巨乳に目を釘付けにされる厳。物理的につながっているのではないかと思え

るほど微動だにしない。よほど見たいようだ。当然のことといえる。涎が垂れる。

「ちょ、お、おね……」

「うふふ、前払いよ、よく見なさいよ。お風呂ではもっとしっかり見せてあげるから、厳も見せるのよ？ お元気ティンティーン」

肩を左右に揺らす。ブルルンと巨大な肉スイカが固めのプリンのように揺れる。ピンクの突起は胸の大きさからすれば小ぶりで上品。

顔だけではなく思わず体ごと振り返り、従姉の巨乳を見上げながら腰を思いきり引く厳。

「あは、超元気っばいね」

——彼氏もこんなギン立ちしてくれないよ。っていうか、されたら引くわー。恋人の反応じゃねーもん。いや、もちろん立ってほしいけどさ。

「それじゃ、そろそろ本当に」

ガラリ、と戸が開く。

「厳、お姉ちゃんいる？ え？」

三姉妹の次女ミュコ。

面倒そうな、不機嫌そうな顔だったのが目を吊り上げる。

「ちょっと厳、なにさせてんのよ！」

「え、俺は別に……」

胸倉を掴まれ、股間を押さえていた手でそれを掴み返す厳。

同じ年だが、女の子の方が発育が早いので少しミュコのほうが背が高い。

が、ミュコにはどうでもよかった。

胸倉を掴む。相手がそれに対応して手を掴む。死角になった股間を膝蹴り。それが姉から教えられた対男用の必殺技の流れ。

グチョ、と小ぶりの女兒の膝が男児の股間に減り込む。くわっ、と目を見開き、愕然とする厳。

「あぐっ！ ちょ、ミュコ……おおおおお、ちょ、うっそ……ふんぐううう」

従妹の巨乳を見てギン立ちの幸せな股間が、根元をゴリっとやられて地獄の股間に早変わり。唇を噛んで汗を噴出させる厳。

股間を押さえ、その場に膝をつく。

手を放して満面の笑みのミュコ。腰を手、首をかしげる。

「うふふ、痛いっしょ？ 私のキ・ン・ケ・リ。キ○タマキック！ 意地悪男子はこの一発で全員終わり。五年も六年もタマタマついてりゃ同じ。キーン・あぐう！・**死**。この黄金パターン。金ちゃんだけに黄金」

慌てて乳房をしまう姉。

「あ、ちょっとミュコー、いきなり**初見殺し玉殺し**は無しでしょ！」

「だってお姉ちゃんにおっぱい出させるとか……」

「バカね、無理やり出されるわけないでしょ？ あんたに男殺しの技教えたの誰？」

「あ、そりゃそうか……絡んできた暴走族を金責めで潰してついでに全員十回ずつ玉踏み潰したお姉ちゃんだもんね」

「一人でやったみたいに言わないでよ、もう」

笑いあう姉妹。笑いつつ、見下ろす。

自分たちにはない部位をやられて芋虫のように転がった従弟を。

「確かにお姉ちゃんなら、無理におっぱい見せろとか言われたら**玉踏み潰してる**よねー、厳の金の玉踏み潰してるよねー」

「私の軽い体重でもタマタマは余裕で潰れるし。薬もあるからすぐ治るしね」

ナノテクノロジーが発達し、どんな怪我でも一瞬で治せる薬がコンビニで買える世界。

そのため女たちの中には、自分にはない部位への攻撃を遠慮する必要はないと思っている者も結構いた。治らないなら潰すなど絶対ダメだが、秒で治るなら治るなら別に構わないだろうと。

「っていうか、それじゃなんであんなこと？」

「からかってやっただけだって」

「そうなんだ……ごめんね厳。おキンキン蹴っちゃって。許してね」

ニヤニヤ。あまり本気ではない感じだった。

見上げる厳にも分る。

「お、お前。そんなに……」

「あは、悪いとは思ってるよ？ でも顔殴ったとかそんなことじゃなくて、ちょっと玉コロキックでしょ？ 男なんだから許してよ。ま、男だから痛いんだろうけど！ ギャははは！ っていうか、マジで立てないの？」

しゃがむ。スパッツのミュコ。

呻きつつ見上げる厳に、薄い下着越しの縦筋の形がはっきりと見える。

——うわ、これマン……ああ、まっ平。まっ平だ。今のと同じ攻撃食らっても何でもない、まっ平らな股間だ……今のこいつの蹴りも、大した威力じゃなかった。こいつ多分、蹴り慣れてる。だからこんな軽くでも十分男を倒せるとわかってて手加減したんだ。こいつ……玉蹴りなれてるって……っていうか、キミハ姉ちゃんに習ったって……

見上げる厳の視線に気づき、唇を舐めるミュコ。見せている。

——見てる見てる。よけーなもんぶら下げてないスッキリした女の子のお股！ よーく見てうらやましがるのね、これが軽ーく蹴られただけで戦闘不能になるような弱点ボールがついてない、完成されたお股ですよー。

ガン見の厳。チラリ、と気づかれていないか気になるのかミュコの顔を見る。笑うミュコ。

「んー、こら厳、何見てるの？」

「い、いや、何も……」

「許してあげてミュコ。厳のタマタマ大きいから、エッチパワーもデカいのよ」

「やだ、デカゴールド？ そういえば、膝に当たった出っ張り、ボリューム結構あった……というか、もっと加減する気だったんだけど、思ったより膨らんでたからちょっと威力出ちゃったわ。ごめんごめん」

「ぐぐぐぐ」

「あは、見てるねー、私のマンマン」

「仕返しする気かもね。しっかりお股守るのよミュコ」

「はーい。って、お姉ちゃーん、守る必要なんかないじゃん」

「えー、なんで？」

「あはは、だって私もお姉ちゃんも……」

ぺしぺし、とスパッツの前を叩く。

「臓物が外に出てないというスッキリしたお股のデザインですから」

「スッキリというか、弱点臓器なんて外に出さないのが普通だと思うけどね」

「きゃー、お姉ちゃんいっちゃった！ 男の股間は設計ミス！」

げらげら笑う姉妹。

股間を押さえ、転がっているしかない巖。

体験版終わり

続きは製品版でぜひお楽しみください